

小金井雑学大学

第16号 平成20年1月

だより

十周年企画の準備中

総合調整役 五十嵐 京子

平成十年三月十五日に小金井雑学大学は開校式を行いました。

今年三月で十周年を迎え、講義は

二二〇回になりますが、始めた

きは十年も続くとは思っていま

せんでした。振り返ってみると続

いた理由は、まず何と言っても講

師を引き受けて下さる方がいら

っしゃったからです。これは理事

をはじめ、この活動を応援してい

ただいた方々の人脈によるとこ

ろが大きく、皆で作りに上げてきた

十年だったと思います。そして、

続いた理由として次に上げられ

るのは、熱心な受講者のおかげで

す。講義に聞き入り、的確な質問

をする受講生のおかげで、ポラン

ティアで来られた講師の方々も

充実した時間を過ごされた方が

多かったようです。さらに、メイ

ン会場となった小金井工業高校

が会議室を貸してくださった事
も継続できた理由として上げる
ことができます。

現在、理事会では大勢の方々

作り上げてきたこの十年を、記念

誌としてまとめる計画を立て準

備作業に入っています。何と言っ

ても講義が活動の柱になります

ので、講義の内容を記録にしよう

と過去の資料をひも解き、録音テ

ープを聞き直したりして、十年を

振り返っているわけです。記念誌

の内容としては、設立のころの

話、講義の記録、そして現在受講

者に書いていただいているアン

ケートのまとめを大きな柱にし

ていきますが、さらに今後、十年

間で印象に残った講義について

の新たなアンケートもお願ひし、

盛り込んでいく予定です。発行は

秋ごろを目標にしています。



今年の十月に小金井市は市制
施行五十周年を迎えるため、昨年
市民に向け記念事業として五十
周年の冠をつけた事業を公募し
ました。小金井雑学大学では、こ
の記念誌の出版記念講演を兼ね
たフォーラムを小金井市の市制
施行五十周年記念公募事業に
応募しました。これまでご協力い
ただいた多くの皆様と共に、小金井
雑学大学の十年を振り返り、新た
な十年を考える年にしていき
たいと思います。

NPO法人全国生涯学習ネットワーク

多摩発遠隔学習講座のご紹介

平成十二年に西東京雑学大学（現在の東京雑学大学）の呼びかけで、多摩地域を中心に各市で活動している約三十の市民大学の団体が集まって、東京生涯学習ネットワークが結成されました。お互いに運営や講師探し

で悩んだりすることもあり、情報交換ができる場としてネットワークを作ったのです。翌年NPO法人（特定非営利活動法人）の認証を受け、更に東京から全国に範囲を広げ、北海道から九州まで参加団体を増やしました。

現在はNPO法人全国生涯学習ネットワークとして活動していますが、集まるにも交通費が必要になるものの、市民大学には潤沢な資金を期待できず、結局お互いの情報交換などインタ

ーネットの活用を検討し試行錯誤の結果、毎月一回のインターネットを使った遠隔学習講座を配信する事業を平成十六年一月から始めました。

講師の方にはパソコンを使って一時間余りの講義をしていただき、その時間は生中継の講義が各家庭のパソコン上で見られます。実際の講義会場は他に、視聴会場を一か所設けて、質問はパソコンのメールで受けるといった試みも行っています。この講座は、新宿にある中央コリドー高速通信実験プロジェクト推進協議会(CCC21協議会)という民間レベルの研究機関から技術的なサポートをしていただいて実現しました。現在は府中に在る多摩交流センターが講演会場とな

って、多摩発遠隔学習講座が毎月第二木曜日の午後2時から行われています。なお、各家庭のパソコンでCCC21協議会のホームページから過去の講義を視聴することが可能となっています。

(<http://www.ccc21.or.jp>)

市民大学は多くの方のボランティアによって活動が支えられています。ネットワークはそうした市民大学を運営している方が、さらに別の活動も担うという構図になっているため、よけいに人材確保が困難な状況にあります。活動の趣旨に賛同し、お手伝いをしてほしいという方の参加をお待ちしております。特にパソコンに強い方の協力を待っております。

(五十嵐 京子記)

編集後記

早いもので、十五号の雑学便りを発行してから、もう一年たちました。十六号では印象に残った講義の感想を書いていただきました。ありがとうございます。今年は十周年、節目の年です。記念講演、秋には、出版記念講演と、大きな行事もあります。課外講義も計画中です。まずは、三月十六日の記念講演に是非お出かけください。

(田中留美子記)

発行責任者 村杉 清和

小金井市中町 x x x x

042 x x x x x x x

聴講の後に

日興コーディアル証券(株) 検査部・部長

須知 正度

平成二〇年三月末で勤続三十五年となり定年を迎える予定で、この一年間の雑学大学における講義を意識してほば欠かすことなく聴講させていただきました。「意識して」とは、

現在、趣味としている和歌(五七五七七、三十一文字)の勉強のヒントになるものは何かないか?との観点であり、その立場から聴講の感想を述べてみたいと思います。

和歌すなわち短歌は、ご承知のとおり千五百年以上もその形式が保たれている短詩です。私はその成立について勉強していますが、様々な分野の視点から検討を加える学際的な方法を試みています。したがって、ヒントとなる題材を求めていろいろなところにアンテナ

を張り巡らせているわけです。

こうした観点から講義で印象に残っているのは、第一に二一五回、「脳に差がつくそろばんのすすめ 脳の活性化に役立つ」佐々木祐治氏(小平市生涯学習親交会会員)であり、第二に二二三回、「芝居を見る楽しみ」山本健二氏(元朝日新聞社編集委員)でした。

第一の講義では、技術よりも数の持つ意味・役割についての関心です。参加者とともに計算を行う過程で、9の意味を解説していただきました。9の整数倍はその各桁を一桁になるまで合計すると9になる。このことが陰陽五行説では九を陽の最高数として位置付けているのではないかと思いました。短歌では五や七の奇数つまり

陽の数が関係しています。私は、和歌や日本古代史と数の係わりについて関心を持つており、さらに勉強したいと考えています。

第二の講義では、日本の演劇地図と称して演劇の形態をその発生した時間の流れの中に位置付け、芸態、テーマ、方法を併せた体系を説明していただきました。そこで印象的だったことは、伎舞楽(祭祀つまり神事として行われ芸能に影響を与えた)は中国等大陸から伝承されたとされるものでもその元では消滅してしまったが、

日本では継承されていることが多いという点でした。蘇莫者はその一つではないかと思えます。日本文化の受容と継承という特色を改めて認識しました。また、能・狂言の謡い等では和歌より広くは五七調七五調の韻文が唱えられます。その韻律と身体のリズムとの関係

にも注目しており、和歌存続の大きな要因と考えられるからです。観劇の楽しみがひとつ加わりました。

このように私の趣味との係わりになることはないか?という観点から聴講し、さらなる勉強の題材を見つけることができました。ありがとうございました。

十周年記念講演のお知らせ

「人類は生き残れるのか
—地球温暖化が突きつける課題—」

持田 直武氏(元 NHK 国際問題解説員)

3月16日(日) 2時より、萌え木ホール

今年一年印象に残った講義を伺いました。

雑大受講この一年

坂田 正雄

雑大開講から十年、月二回の

講義も十二月十六日で二二五回

を数えこの一年でも二三回とな

る。これまでの講座も多岐に亘

り、最近でも人の毛髪、人の声、

そろばんなどユニークなものが

あった。勿論政治、経済、文化

なども適宜採用されて興味深い

ものが多い。

二二四回のNPO法人ピン・

シャン・コロリ研究会理事末宗

直人教授の、会名がそのまま講

義テーマという珍しいものであ

る。

この世に生を受けたものは必

ず死が来る「生老病死」である。

誰しもが模索し願うものはピ

ン・シャン・コロリでありピン

とした体、シャンとした精神で

あの世に行きたい。そのために

どうするか、教授は基本的には

一、外出すること（外気に触れ

人と接し感動と笑い）

二、運動（自分に合ったもの、

教授は「真向法」：宗教で

はなく四つのポーズの組

み合わせ、鈴木元都知事が

九十才を過ぎて掌が床に

着く柔らかさ）

三、食べ物（飽食時代で調整は

難しいが、食は生きる原点

であり健康の基本である）

更に「延命治療」（尊厳死）

にも触れたが、これは身近な人

間の最終問題で種々議論され

るが、未だ法制化されない大き

な課題である。ロングステイ

（長期滞在）についても述べた

が、日本交通公社の出身だけに
問題点はあるとの前提で中身
のある現状を話された。結論と

してPSK研究会の活動を通

じ、健康な体と健全な精神を身

につけ人生を如何に生き抜く

かにあり感銘を深くした。

小金井雑学大学はいつでもも

気楽に参加できる開かれた場」

であり、学長はじめスタッフの

皆さんの献身的努力に感謝し、

益々のご健闘を心からお祈り

する次第である。

佐藤一斎「言志四録」

少にして学べば即ち壮にして

為すことあり

壮にして学べば即ち老にして

衰えず

老にして学べば即ち死して朽

ちず

新たな講座を考えて

学長 富永一矢

「団塊の世代」という言葉が新

聞紙上やテレビなどでしきりに

見聞するようになってき、参考

文献なども本屋の棚に沢山並ぶ

ようになってきた頃、雑学大学

としても、小金井という一地域

としてこの問題を考えようとい

うことになりました。

そこで通常の講義の中に、定年

を迎え新たに地域で過ごす時間

を有意義に過ごすためのヒント

になるような講座を設ける事に

しました。

彼らの最大の特徴は、日本が

大きく変化した戦後の生まれ

で、全く新しいモラルの中で育

つてきたということであり、そ

こをきちんと理解しないと本質

は掴めないし、講座を組むに当

たつても生半可なことではない

との認識に立ち、まだまだ試行

錯誤の中にあります。皆様のお

力をお貸し下さい。